

## 「家の教会」

2005.4.17 赤羽聖書教会主日礼拝説教

3. キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによろしく伝えてください。
4. この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。  
この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。
5. またその家の教会によろしく伝えてください。  
私の愛するエバネトによろしく。この人はアジアでキリストを信じた最初の人です。

## 説教

これまで、前回、前々回と、祈りについて学んできました。今日は、祈りに関してどうしてもお話ししたいこととして、家族で祈る祈り、すなわち家庭礼拝についてお話しします。

家族で祈る祈りというのは、とても重要なものです。これはまず現実的な、実際の観点から言って、そうだと思います。「主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦勞は何もそれに加えない。」(箴言 10:22)とみことばにあります。家庭の祝福の度合も、「人の努力・苦勞」如何によらず、「どれだけ神さまから恵みを受け、祝福を受けたか」という、「主の祝福そのもの」にかかっていると言って過言ではないでしょう。その意味で、家庭の祝福は、はっきり言って、家庭礼拝にあると言えると思います。これは、私自身のこれまでの小さな経験から言えることでもあります。私自身の経験では、家庭礼拝なくして、家庭の祝福はないというのは、実感としてそう思います。勿論、家庭の祝福のためには、まず何より、第一に、家族みな日曜日教会に来る、ということが大切なことです。みことばに教えられている通り、安息日をきよく守ることなくして、それこそ私たち個人の祝福も家庭の祝福もありません。そして、第二番目には、先週学んだ通り、教会の祈禱会に足を運んで「共に祈る」ことが、さらに祝福を受ける道です。たとえ二人でも三人でも、神さまを信じる同じ信仰に立つ兄弟姉妹と「共に祈る」ことは、「私もその中心にいる」とお約束くださるイエスさまの栄光を見、その恵みを受ける上で大切なことです。しかし、これに加えて、自分の家庭を維持し、のみならず、その夫婦関係、親子関係が祝されて、自分の家庭が神さまの祝福を受けていくためには、どうしても家庭礼拝が必要だと思います。つまり、夫婦で共に祈る、親子で共に祈る、あるいは家族全員で共に祈るということが、必要であると思います。家庭礼拝を捧げずしてその家庭が祝福されるというのも、私としては考えがたいことです。

聞いてみると、長年信仰生活を送っているクリスチャンホームでも、意外と家庭礼拝をしている家は少ないですし、祈りの熱心な韓国の教会でも、信徒たちは、毎週の日曜礼拝は何があっても休まない、おまけに水曜祈禱会、金曜徹夜祈禱会、さらには毎朝早天祈禱会にまで参加しているという家庭でも、実は自分の家庭では家庭礼拝をしていないという家がほとんどだということが最近問題視されているようです。早天祈禱会で祈り終わったら、そのまま職場に行ってしまう、家庭礼拝をしないと言うのです。これはオランダで学んだ、神学校の教授が指摘していたことです。教会で祈る、個人で祈る、しかし同時に、家庭を持っている者は家庭でも祈る、同じ信仰に生きる家族と共に祈るということは、考えてみれば当然のことです。教会では祈る、しかし家では祈らない、というのは変です。教会では兄弟姉妹と共に祈る、しかし家庭では同じ信仰に生きているはずの自分の家族と共に祈らない、というのはどうでしょうか？反対に、家では祈るが教会には来ないというのも困りますが.....、教会で祈り、家でも祈る、というのが最も良いと思います。

そこで、今日は、ローマ人への手紙 16 章にあるパウロの挨拶文から、共に家庭礼拝の祝福について学びましょう。

3. キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによろしく伝えてください。

4. この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。

この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。

5. またその家の教会によろしく伝えてください。

私の愛するエパネットによろしく。

この人はアジアでキリストを信じた最初の人です。

5 節に、「その家の教会によろしく」、「家の教会」とあります。その当時の教会のことを考えると、そもそも教会というのは、建物ではなく、人の集まりのことを言います。イエスさまに特別に選ばれ・召されたキリストの弟子たち、神の子どもたちが集まる所、それが教会です。当然のことですが、その際、すなわち初代教会の時代、教会には会堂というものはありませんでした。もっぱら信者の家で礼拝しました。つまり、初代教会の礼拝場所は、もっぱら信者の家であったのです。例えば、エルサレムにあるマルコの母マリヤの家がそうです。使徒ペテロが迫害により拘束されていた時、「そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた」（使徒 12:12）とあります。このことから、教会は、信者の家に集まって、そこでみことばを学び、神さまを礼拝したのです。それで、使徒パウロは、これを「家の教会」と呼んでいます。この場合、「個人の家」であるけれども、「公の教会」であり、れっきとした「公の教会」であるけれども、しかし「個人の家」でもあります。不思議な感じがしますが、「家の教会」という概念には、「家」と「教会」の区別の無さが実に絶妙に表現されているように思います。つまり、私たちが、今現在、日常住んでいる、各個人の住む「家」は、実はそれがそのまま「教会」となりうるし、現にそれは「教会」でもある、ということになるのです。ですから、言うなれば、「家」は「教会」の延長と言うべきものです。「教会」の出張所です。そこでみことばを聞き、神さまを礼拝して、神の栄光をあらわす、「教会」の出張所です。それが「家の教会」という言葉に啓示された、一つ概念であろうと思われま。

ちなみに、この「家の教会」という言葉のギリシャ語を敢えて直訳すると、「家、すなわち教会」と同格になっており、これは他の第一コリント書、コロサイ書、ピレモン書でやはりパウロが書いた「家の教会」あるいは「家にある教会」に於いても、原文は同じです。つまり、「家」は、すなわち「教会」なのです。「家」は「教会」です。少なくとも、使徒パウロは、「家」を「教会」と見ていました。単に会堂がなかったからと言うだけでなく、場所がなかったからと言うにとどまらず、私たちの住んでいる「家」は「教会」なのです。3 - 5 節のみことばによると、ここでパウロの言う「家の教会」の主催者は、当時ローマ教会のメンバーであった「プリスカとアクラ」というキリスト者夫婦であったことがわかります。

3. キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによろしく伝えてください。

4. この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。

この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。

5. またその家の教会によろしく伝えてください。

私の愛するエパネットによろしく。

この人はアジアでキリストを信じた最初の人です。

ここに名指しされている「プリスカとアクラ」が「家の教会」を主催し、この一文は彼らに送った挨拶です。「プリスカとアクラ」夫妻というのは、もともとローマに住んでいた人です。名前から察して、妻のプリスカはおそらくローマの貴族出身であろうと思われます。夫のアクラは、Pontus 生まれのユダヤ人天幕職人だと「使徒の働き」で解説されています。「プリスカとアクラ」とあるの

は、おそらく妻のプリスカの方が信仰篤かったからであろうと言われます。彼らは、どういう経緯でかわかりませんが（同じ信仰を持って教会で出会ったのかわかりませんが）、いずれにせよ、（おそらく）民族も違い、身分も異なりながら、出会って、結婚して、ローマで生活をしていました。しかし、クラウデオ帝によるユダヤ人追放政策で、西暦49年頃ローマから追放されます。それから、コリントでパウロと出会って、およそ一年半の間パウロの伝道を助けます。そして、パウロがエペソに行く時には、彼らも同行してパウロの伝道を助けます。パウロが一時エルサレムにのぼって行った時には、彼らはエペソにとどまって教会を守りました。その間、かの雄弁な伝道者アポロと出会い、彼がヨハネのバプテスマしか知らなかったため、彼にキリスト教の正しい教理を教育します。それから間もなくパウロが戻るや、およそ二年余り、パウロと共に伝道して、「小アジア全土がみな主のこぼを聞く」という、実に爆発的な伝道の成果を見ます。それからしばらくして、（迫害が収まったせい）二人はローマに戻って「家の教会」の育成に励みますが（ローマ 16:5）、パウロが処刑されて召される直前には、再びエペソに赴き、若いテモテ牧師と共に宣教していたようです（テモテ 4:19）。これが「プリスカとアクラ」のおおよその略歴ということになります。その間、アテネ伝道の不振とコリントでの迫害に意気消沈するパウロを励まし、福音の教えをよく理解していない、言わば未熟な伝道者アポロを教え励まし、さらにはエペソでの町あげでの猛然たる迫害の時もパウロと苦難を共にしてパウロを守り、本当に「死を覚悟する」ほどの（コリント 1:9）酷い迫害を耐え忍びながら、パウロの伝道を助けました。それで、パウロはこの夫妻のことを「私の同労者」と呼んでいます。テモテやオネシモには「我が子テモテ」「獄中で生んだ我が子オネシモ」と呼んだパウロが、「プリスカとアクラ」に関しては、「私の同労者」と呼びます。これは「上下の別なく一緒に働く者」という意味です。使徒パウロと同等に、上下の別なく、彼と一緒に働く、それが「同労者」です。牧師のことを例に挙げると、例えば、私は牧師ですから、同じ伝道者である小岩井信伝道師のことは「同労者」と呼ぶことができます。でも、教会の一般の信徒のことは「同労者」と呼ぶことはできないし、みなさんもそう呼ばれても困るのではないかと思います。「そんなに期待しないでくれ」と怒られるかも知れません。だけど、「プリスカとアクラ」は、そう呼ばれたのです。使徒パウロに、「同労者」、「パウロと共に主の働きをする同労者」と呼ばれているのです。そして、「この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれた」と最大の讃辞を贈られています。この直訳は、「この人たちは、私の魂のために自分自身の首を置いた」です。つまり、彼らが使徒パウロと共に主のために働く覚悟は並の覚悟ではない、パウロと生死を共にするくらい、死ぬことさえも覚悟して、「自分の首を置いて」、当時の死刑は杭の上に自分の首を置いて、それをナタで切り落とすというもので、パウロもローマでそうされて死んだということで、その杭が残され、殉教の場面が絵になってもいますが、まさにいのちを賭けて、パウロと共に、主に仕えたのです。使徒パウロも、「主のためなら自分はいのちを捨てても惜しくない」といのちを賭けて伝道していましたが、その使徒パウロと共に、「プリスカとアクラ」夫妻も、主のために、いのちを賭けて、奉仕していたというのでした。

そして、この賞賛は、単にパウロひとりにとどまることなく、「この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。」と、異邦人のすべての教会が感謝していると言うのです。どうして「異邦人のすべての教会」が彼らに感謝しているのでしょうか？ 答えは簡単です。この夫婦が、「異邦人のすべての教会」を助けたからです。献金をもって助けたのか、具体的な労をもって助けたのかわかりませんが、いずれにせよ、「プリスカとアクラ」は、使徒パウロを支えたのみならず、「異邦人のすべての教会」をも助けたのです。そして、感謝されているのです。私たちは日本同盟基督教団という小さな教団に属していますが、およそ200の教会全部から感謝されている人など、牧師も含めてどれだけいるのでしょうか？ おそらく、私の予想では、一人もいないと思います。全教会から感謝されるような信徒はおるか、そのような牧師さえないと思います。もし、例えばそんな牧師がいたならば、総会で理事長選挙の際には、全会一致で理事長に選ばれると思いますが、そんな人がいたためしはありません。少なくとも、私は見たことがありません。こんな小さな教団でさえ、そうですよ。ましてや、初代教会、小アジア、ローマにまで及ぶ教会全体に感謝されているという「プリスカとアクラ」とは一体どういう人なのでしょう。よほどの人物です。超有名人でした。スーパー信徒です。彼らは使徒でも牧師でもありません。しかし、牧師並みの、あるいは牧師以上のすぐれた働きをした信徒でありました。使徒行伝を見ると、初代教会に於いて、パウロやベテロ、ヨハネといったそうそうたる使徒たちが華々しく活躍します。

ステパノという執事が迫害を耐え忍んで雄々しくキリストを証して殉教します。しかし、そのような、単に教会の役職にある者だけが教会を建て上げたわけではありません。立派な信徒がいたのです。力ある信徒がいました。いのちを賭けて主のために働いた信徒がいました。使徒パウロを助け、異邦人の諸教会を助けて、すべての教会から感謝されるほどの働きをした信徒がいました。使徒パウロと共に、主の苦難を耐え忍び、主のために戦う信徒がいました。そうやって、使徒・牧師と共に教会を建て上げていた信徒がいました。それが「アクラとプリスカ」です。

私は、この教会から多くの献身者、牧師、伝道者が出ることを祈っております。でも、すべての信徒が牧師、伝道者になる必要はありません。それは、だからといって、すべての信徒が、牧師、伝道者にならないからといって、いい加減な献身ぶりでもいいという意味ではありません。イエスさまを信じて救われた人は、主のために生きるべきです。それは、牧師、伝道者と同じように、主にいのちを捧げて生きるべきです。キリストの十字架の血により罪を贖われ、永遠のいのちをいただいたのですから、この世の与えられたいのちを主に捧げて、主のために生きていくべきです。それが、聖書の教える、私たちキリスト者の生き方です。だから、牧師、伝道者にならないなら、「プリスカとアクラ」にならなきゃ。使徒パウロから「同労者」と呼ばれる信徒にならなきゃ。主のために犠牲を払って、戦って、教会を建て上げていく、立派な「平信徒」にならなきゃ。

そして、その始まりが、まず自分の「家」を「教会」とすることだと思います。「プリスカとアクラ」に関して学ぶべきことは多々ありますが、今日はただ一点、彼らが自分の「家」を「教会」にしていたという点だけを記憶したいと思います。自分の「家」を「教会」とするのは、自分の「家」を「教会」とするとは、どういうことでしょうか？それは何よりも、まず、「家」で神さまを礼拝することです。そして、主の教えを家族の間で実践するのです。

私たちは、自分の家庭が神さまから与えられたことを心から神さまに感謝しましょう。家庭に於いて神さまを礼拝しましょう。家庭は小さな教会です。天国の主張所です。神さまを礼拝して神さまの愛を実践するところです。そうやって神の栄光をあらわすために神さまは私たちに家族を、家庭を与えて下さいました。家庭の主はイエスさまです。主人は牧師です。妻は執事です。子どもたちは信徒です。夫婦で祈りましょう。親子で祈りましょう。

みなさんが自分の信仰の家族と共に毎日礼拝を捧げ、みなさんのご家庭が、天国の喜びと平和に満ちるよう、主の御名により祈ります。